



池田督司医師



井上潤一医師

# やまなし 医療最前線 20ナとの闘い 県立中央病院から

〈206〉

新型コロナウイルス感染症による重い肺炎の治療で、人工心肺装置「ECMO（エクモ）」に注目が集まっている。重症者を中心に受け入れる山梨県立中央病院はエクモの追加配備に加え、取り扱いを学ぶ研修を実施して、治療体制を拡充している。

度救命救急センター。この場所にも、重度の呼吸不全となった新型コロナウイルス患者の命をつなぐ「最後のとりで」となるエクモが置かれている。

新型コロナ感染などによって引き起こされる肺炎が悪化すると、血液中に酸素を取り込む肺の機能は低下する。重症者には口から管を入れ、酸素を含んだガスを送る人工呼吸器が用いられるが、それでも回復が難しい場合に使われるのがエクモだ。血液を管で体外に導き出して人工肺で酸素を供給、再び体内に戻す仕組みで、回復するまで肺を休ませることができる。

新型コロナの感染拡大を受け、県立中央病院は6月、エクモを2台、人工呼吸器を20台追加した。保有数はそれぞれ5台、71台となり、重症患者への対応に向けたハード面を強化した。

2009年の新型インフルエンザ流行時に海外で高い治療実績を誇ったエクモだが、出血などの合併症の危険を伴う。体外に導いた血液が固まれば人工肺に詰まり、正常に作動しなくなる恐れもある。

集中治療科部長の池田督司医師は、重度の呼吸不全患者に対するエクモを用いた治療で国内屈指の実績がある日本医科大付属病院に3年間勤務。7月に県立中央病院に復帰した。人形を用いてエクモ使用時のシミュレーションを行う院内研修で指導役を務めるなど、医療チームのさらなる技術向上に力を注ぐ。

## 人工心肺装置「ECMO」増設 人材生かし技術底上げ



このため、医師、看護師、機器を扱う臨床工学技士がチームとなり、24時間態勢で患者の状況を適切に管理する必要がある。人工呼吸器から切り替えるタイミングを含め、使いこなすには高度な専門知識と経験が欠かせない。

県立中央病院は主に心肺停止で救急搬送された患者に対して、昨年だけでも35例のエクモ使用実績がある。全国的にはエクモに精通した医療従事者の確保が課題となっているが、高度救命救急センター統括部長の井上潤一医師は「センターのスタッフはエクモの管理にも合併症への対応にも十分な技量と経験がある」と胸を張る。

県による最新の推計では、感染第2波のピーク時の患者は最大246人、このうち重症者は24人となっている。県立中央病院では新型コロナウイルス患者へのエクモ使用実績もあり、井上医師は「いつでも対応できるので、県民には安心していただきたい」と強調する。

適切に扱うためには高度な専門知識と経験が必要。人工心肺装置「ECMO（エクモ）」の池田督司医師は、重度の呼吸不全患者に対するエクモを用いた治療経験が豊富にある。

県立中央病院は主に心肺停止で救急搬送された患者に対して、昨年だけでも35例のエクモ使用実績がある。全国的にはエクモに精通した医療従事者の確保が課題となっているが、高度救命救急センター統括部長の井上潤一医師は「センターのスタッフはエクモの管理にも合併症への対応にも十分な技量と経験がある」と胸を張る。

集中治療科部長の池田督司医師は、重度の呼吸不全患者に対するエクモを用いた治療で国内屈指の実績がある日本医科大付属病院に3年間勤務。7月に県立中央病院に復帰した。人形を用いてエクモ使用時のシミュレーションを行う院内研修で指導役を務めるなど、医療チームのさらなる技術向上に力を注ぐ。

県による最新の推計では、感染第2波のピーク時の患者は最大246人、このうち重症者は24人となっている。県立中央病院では新型コロナウイルス患者へのエクモ使用実績もあり、井上医師は「いつでも対応できるので、県民には安心していただきたい」と強調する。